

簡が出土している（本誌第五・一〇・一一・一二号）。

8 木簡の釈文・内容

一 第一三六次調査

(1) □ □

091

長さ五七mm幅二〇mmの削屑であるが、釈読不能。他の四点はさらに小型で、わずかな墨痕が確認できるにすぎない。

二 第一三八―二次調査

(1)

□ □ □ □ □
〔4〕

(8)×(28)×3 081

横材で、四周欠損。釈読できる文字は、中央下の一字のみ。一見「己」「巳」にみえるが、中に点があること、文字の頭に「ク」のくずしを確認できることなどから「色」と判断した。全体の内容については不明。

9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇六』（二〇〇六年）
同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』二〇（二〇〇六年）

（市 大樹・竹本 晃）

『評制下荷札木簡集成』

（奈良文化財研究所史料第七六冊）の刊行

二〇一〇年ほどの間に飛鳥池遺跡、石神遺跡、飛鳥京跡苑池遺構などから陸続と発見された七世紀の木簡は、律令制形成期の豊かな歴史像を提供してくれている。中でも荷札木簡は、地方支配や収取体制を端的に示す史料として重要である。

本書は、こうした観点から、七世紀の評制下の荷札と判断される三三九点の木簡を国別に集成し、鮮明な写真を提供し、かつ詳細な解説を施したものである。奈良文化財研究所だけでなく、奈良県教育委員会（奈良県立橿原考古学研究所）をはじめ各地の調査機関が担当した調査で出土した木簡も収録しており、木簡調査機関の幅広い連携によって初めて可能になった出版である。収録にあたっては、各機関の責任において釈文の再検討を行ない、最新の成果が収められている。また、七世紀の荷札を総合的に論じた総説を付す。市販は左記の通り。

A4判、カラー図版二葉、図版六四頁、本文一一六頁

定価 五二五〇円（税込み）

東京大学出版会、二〇〇六年五月刊行